巻頭言

現場に学び、現場に返す



消防大学校長　笠松　拓史

この夏の人事異動で消防大学校長を拝命いたしました。全国の消防の「現場」で活躍されている消防職員・消防団員の皆さまが学ぶ場を預かることとなり、身の引き締まる思いでいます。

消防の現場に直接立った経験のない私にとって、最も印象に残っているのは、入省２年目に旧国土庁の防災局に出向し、対応にあたった阪神・淡路大震災の時のことです。未曾有の災害を前に、当時は情報も手立ても時間も足りない中で、まさに現場の消防職員・団員の皆さまが一人でも多くの命を救おうと懸命に奮闘しておられた姿が、今も胸に刻まれています。あの時、現場の力は日頃の備えと学びに支えられているのだと思いました。

「消防における学び」というものを考えると、その特質は「常に学び続けること」、そして、その成果が「人命という形で問われる」点にあると思います。火災も災害も救急も、現場は同じ姿で二度と現れません。更に、豪雨災害の激甚化、大規模地震への備え、救急需要の増大、人口減少に歯止めがかからない中での消防職員・団員の確保など、消防を取り巻く課題は年々複雑さを増しています。このため、昨日までの正解が、明日の消防現場で通用するとは限りません。だからこそ、学びを止めず、知識と技術を更新し続けることが、消防に携わる皆さまの重要な使命だと思います。このため消防大学校では、全国から消防幹部やその候補生の皆さまが集い、講義や演習を通じて、常に現場で役立つ最新の知識と技術を身につけていただけるよう支援をしています。

また、消防の学びは、「命を救った」という成功体験だけでなく、ときに苦い経験からも得ていかなければなりません。救えなかった事案や殉職事故の検証はつらい作業ですが、その様な現場から得た教訓を個人のものにとどめず、組織の知として共有し、次の世代へ確実に引き継ぐことが、同じ悲劇を二度と繰り返さないための道でもあります。「現場で得た学びを再び現場に返す」、そのために消防大学校は、現場の貴重な経験を、全国の仲間が財産にする場として、重要な役割を担っていると考えています。

もう一つ、消防大学校の存在価値は、地域も、所属している組織の規模も異なる消防の仲間が、寝食を共にし、互いの経験を語り合う時間を提供することにもあります。東京や横浜市など人口が多い地域の消防と、私の故郷・北海道美唄市のような過疎地域の消防では、現場で直面する課題が異なることが多々あります。しかし、その違いから学び合うことで、出身組織内の経験や知識だけでは得られない新しい考え方や視野が持てるものと信じています。

これからも消防大学校は、現場に学ばせていただく姿勢を大切にし、現場から学んだことを現場に返す循環の拠点となるよう、教職員と共に力を尽くしてまいります。引き続き、全国の消防職員・消防団員の皆さまのご理解とご協力を賜りますよう、この場をお借りしてお願いいたします。